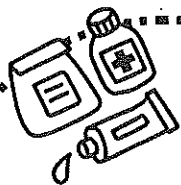


◆相楽郡の健康な生活に役立つ情報を発信します◆

相楽医師会だより24

● 24号 平成23年5月発行 ● 社団法人 相楽医師会
● 京都府相楽郡精華町乾谷金堀3-2 JA京都やましる山田荘事務所2階
● URL/http://www.souraku.kyoto.med.or.jp



こどもの病気について

一般病院における小児の救急対応



毎年恒例となっている小児救急フォーラムが、今年度は去る11月27日(土)に精華町役場交流ホールにて行われました。今回は「一般病院における小児科救急対応」という題で、救急医療を担当する病院側の視点からお話しさせていただきました。まず導入として小児救急に関する情報のさまざまな入手法について。そして前半で小児救急疾患の種類と、代表的な病気に関する症状や注意点の概略について説明。後半では小児救急医療の現状(窮状)や、それを打開すべくなされている努力の中から一つの取り組み例としてトリアージ法について、それぞれ紹介しました。具体的な内容は以下の通りです。

①小児救急医療に関するインターネットサイトと電話相談事業

こどもの救急<http://kodomo-qq.jp/index.html>
日本小児科学会が監修小児救急電話相談(#8000番)
各都道府県内担当病院の小児科医・看護師が対応

②小児救急疾患の種類として代表的なものを挙げる。

その中からけいれん性疾患・気道の感染症・気管支喘息・消化器系の感染症・脱水症・腸重積症について、それぞれの疾患の特徴を概説しました。

☆けいれんを起こしている児をみたとき、まず周囲が落ち着くこと。

気道確保が優先。決してあわてずに、救急受診する手段を考えてください。

また入院適応の判断基準について。

☆気道の感染症から、下気道炎(肺炎・気管支炎)の経過や診断法について。

クループ症候群に特徴ある症状(犬吠様の咳や吸気性の喘鳴)。

☆気管支喘息の発作症状の強さによって、受診すべき緊急性が違います。

☆消化器系の感染症の原因(ノロウイルスやロタウイルスなど)、腸閉塞(麻痺性イレウス)に陥る可能性。

☆脱水状態か否かを見極める症状について。「目が落窪んでいる」「涙がでない」

「唇や皮膚が乾燥」「尿がでない」「うつらうつらとしていたり、ぐったりしている」このような状態ならすぐ救急受診すべきです。

☆腸重積症に特徴的な症状(間歇的な涕泣・血便・突然の嘔吐)。早期診断・治療が原則です。

小児救急医療の切実な現状(窮状)と新しい取り組みの一例国内の全医師数が増加しているのに比べ、小児科医の数は逆に漸減しているデータを提示しました。欧米諸外国に比べても、単位人口当りの全小児科医数・病院勤務小児科医数とも圧倒的に少なく、統計上でも小児救急医療の深刻化が反映されています。そのような状況の中で、トリアージ法を含めた新しい取り組みが模索されています。トリアージ法とは「時間的・資源的制約があつて任務や課題のすべてを実施・完了できないとき、一定の基準に従つて着手の優先/非優先を判断すること」を言います。

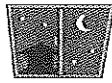
通常、災害医療などで使われる言葉で、傷病者(患者)を重症度と緊急性によって選び分ける作業のことです。小児を含めた救急医療現場の昨今の疲弊状況が深刻化するなかで、日常の救急医療現場にもトリアージ法を導入しようとする動きが全国的に活発になっています。一例として、P-CTAS(カナダ小児救急トリアージ)をお示しました。

最後に結論として、小児救急医療を含めた地域小児診療体制の進むべき方向性を、地域ぐるみで議論し皆で知恵を出し合つて考えることが大切であり、

そのためにまず現状を知ることが必要との旨をお伝えし、講演を締めくくらせていただきました。

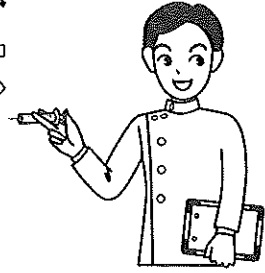
今回のテーマがそのきっかけになれば幸いです。

公立山城病院小児科
和泉 守篤 先生



こどもの病気について

家庭での対応の大切さ



堀井こどもクリニック
堀井 由博先生

「夜間・休日の急な発熱」
「咳や鼻水で夜が眠れない」
「嘔吐や下痢で食事や水分もとれない」
などは、多くの方が経験されていると思います。こどもの病気は、多くは突然の発症ではじまり予想もできませんし、親の心配や不安は大きく、ついあわててしまうことが多いものです。

夜間や休日の際には、すぐに医療機関にかかるべきか迷うこともよくあることです。こどもの急病に対しては、まず第一に「冷静な対応と判断」が大切です。あわてずにこどもの状態をよく観察してあげて下さい。

体温の測定、呼吸の様子、顔色の具合、うんちの状態などの症状の把握が大事です。また、比較的元気があり本人に余裕があるかどうか、全身状態の把握も大事です。すなわち、急病(急に病気になること)は必ずしも救急ではありませんが、ぐったりして反応に乏しく意識が低下している時、顔色が悪い時や呼吸が苦しい状態(呼吸困難)など全身状態が不良で、急を要する場合には医療機関に速やかに受診が必要で、場合によっては救急車を依頼することもあります。

こどもの状態を把握して、冷静に判断し対応する必要があります。
次に大切なことは、「家庭でのケア」です。家庭での対応の原則は、安静と水分の補給が大切です。自宅での療養は、こどもの安静につながりますし、状態の把握にも大切です。
前日に発熱があっても翌朝熱が下がったので、保育所、幼稚園や学校に行かせたということはよくありますが、少なくとも1日以上は回復したことを確認することが重要です。

病気の始まりだけでなく回復期のケアも同じ位に大事なことで、病気の時には、決して無理をさせないようにして下さい。

また、病気の時には、食事が十分にとれないことはしばしばありますが、その際には十分な水分の補給が大切です。糖分や電解質を含む飲み物は、水分の吸収も良いので適切です。

医療機関を受診した後も「家庭でのケア」は必要です。処方された薬は、指示された通りに投与して下さい。内服薬はきちんと飲ませて下さい。食後にこだわらずにあげて下さい。1日2回の薬は、朝と夜に約12時間ごとに、1日3回の薬は「起きている間に等間隔で3回」を目安で、朝・午後・夜にあげて下さい。また、処方された薬は、きちんと最後まで飲むのが原則です。症状が良くなったからといってやめてしまうと、せっかく治りかけていたのに、またぶり返してしまうこともあります。

薬を途中でやめていいかどうかは主治医にたずねてからにして下さい。

残った薬も次に使うかどうかは、主治医に相談してからにして下さい。
また、症状が改善しているのか、悪化しているのか様子を観察することはとても大切なことです。薬を飲んでいても症状の改善がない場合、他の症状が加わったりする場合や全身状態がより悪くなっていく場合には、もう一度再診して下さい。こどもの病気の改善のためには、「家庭でのケア」は、とても大事です。

- 予防接種は感染症予防の第1歩。接種時期を確認して忘れないようにうけましょう。
- 年に一度は健康チェック。基本健診・がん検診をうけましょう。



受診の時には、保険証を忘れずに！